宇都宮大学国際学部とビクトリア工科大学文学部における文化関連科目の現状比較

—文化学の体系的教育方法の開発に向けて—

高　際　澄　雄　シャーマン・リュー　柄木田　康　之

1　はじめに

1986年10月にレイキャビックで米ソ首脳が核兵器削減に合意して以来、1989年11月のベルリンの壁の崩壊と1990年の東西ドイツの統一によって、多くの人は冷戦構造が変化し世界平和の実現が間近いのではないかと期待した。しかし現実には、翌年に湾岸戦争が勃発し、その後も旧ユーゴスラビアでの内戦激化、ソ連邦でのクーデター発生、ソ連邦の崩壊とチェチェン紛争の開始、中東和平実現の延期、アフリカでの内戦継続、北アイルランド紛争の混迷化、コソボ紛争と、事態は人々の期待とは異なる方向に進行し、平和実現の難しさを知らされた。

この間に、こうした紛争には政治だけではなく文化的諸問題も大きく関与していることが明らかとなり、文化に関する研究が活発となった。また同時平行的に地球規模で物的人的交流が活発化し、異文化理解の必要性と異文化間摩擦・衝突の問題究明の緊急性が認識されるようになり、文化研究の隆盛に拍車をかけることとなった。

1994年10月に設置された宇都宮大学国際学部も、国際紛争における文化的要素の重要性と国際化過程での異文化理解の必要性、および異文化間摩擦・衝突の問題究明の緊急性の認識のもとに教育研究体制が組まれている。しかし実際に教育研究に従事してみると、文化に関する領域は広大であり、また文化に関する事象も大量であって、限られた時間内に効果的な教育研究を行うことの難しさを痛感させられる。とりわけ、文化に関する教育は世界的に見ても教育が行われるようになって日が浅いこともあり、その体系性の欠如が本来の目標の実現を阻害している。

本研究を担当した宇都宮大学国際学部の研究分担者３人は、国際学部設置当初から国際

文化学科に所属し文化に関する授業科目を担当して、こうした文化関連教育の体系性の必要性を痛感してきた。幸い1996年に宇都宮大学とオーストラリアのビクトリア工科大学との学術交流協定が締結されたので、多文化教育において先進国であるオーストラリアでの高等教育における文化関連教育について実情を調査する機会が生まれた。ビクトリア工科大学においても大学の設立が1990年と新しく、宇都宮大学国際学部と類似の問題をもっていたこともあって、二大学での文化に関する教育体制および教育方法の比較を行って、それぞれの改善につなげたい希望が出された。そこで、ビクトリア大学文学部アジア国際学科の３人の教員によって、宇都宮大学国際学部とビクトリア工科大学文学部の文化に関する教育の現状を調査・比較し、体系的な教育を提案するために文化学の体系的教育に関する研究を行うことになり、文部省科学研究費を申請したところ承認された。研究は宇都宮大学国際学部教授 高際澄雄が研究代表者となり、宇都宮大学国際学部助教授 Sherman Lew、宇都宮大学国際学部助教授 柄木田康之、ビクトリア工科大学文学部教授 Stephanie Fahey、ビクトリア工科大学文学部講師 田中悦子、ビクトリア工科大学講師 Mark Stevenson によって行われた。本論は、この研究のうち宇都宮大学国際学部とビクトリア工科大学文学部の文化関連科目に関する教育現状を比較しこれからの発展を探った部分をさらに検討を加えて公表するものである。

2　ビクトリア工科大学文学部と宇都宮大学国際学部の概要

ビクトリア工科大学は、1990年にフッツクレー工業専門学校(Footscray Institute of Technology)とウェスタン専門学校(Western Institute)が統合され、設立されたビクトリア州州立大学で、現在、文学部、ビジネス学部、理工学部、人間開発学部、技術再教育部の４学部１部局から成っている。各学部ともに大学院の課程をもっている。教職員数は1,900人であり、また学生数は22,000人である。敷地はビクトリア州の首都メルボルンの北西部の主要な６つのキャンパスに分かれている。

ビクトリア工科大学文学部は、アジア国際学科、コミュニケーション言語文化学科、心理学科、社会調査コミュニティー学科の４学科より成り、常勤教員数は102人である。

宇都宮大学は、昭和24年に栃木師範学校、栃木青年師範学校、宇都宮高等農林専門学校が統合され、新制大学として設立された国立大学で、現在国際学部、教育学部、工学部、農学部の４学部で構成されている。３学部にはすでに大学院が置かれ、国際学部にも1999年４月に大学院が設置された。教職員定数は、1998年５月１日現在で、常勤の大学教員

402名、常勤の附属学校教員83名、職員287名である。学生数現員は、同年同日で4学部合計4850名、大学院671名である。同大学は宇都宮市の南東部に位置し、敷地は事務局本部、国際学部、教育学部、農学部のある峰キャンパスと、工学部のある石井キャンパスに分かれている。

宇都宮大学国際学部は、1994年10月に設置され、1995年4月に最初の学生受入を行った。国際社会学科と国際文化学科の2学科で構成され、入学定員は各学科50名、1998年5月1日現在で両学科全学年で合計504人が在籍している。常勤教官数は42名である。

3　ビクトリア工科大学文学部における文化に関する教育の現状[1]

(1)　教育課程

ビクトリア大学の学年暦は毎年2月の最後の週にオリエンテーションが行われ、3月の第1週から授業が開始される。学期は3学期あるが、文化に関する授業は第1学期と第2学期に開講され、第1学期は6月初旬まで（途中1週間のイースター休暇がある）13週続けられる。1週間の試験準備休暇のあと3週間の試験期間がある。試験期間が終わると、2週間の中間休暇がある。第2学期の授業は7月の下旬に開始し、10月の下旬に終わる。ここにも9月下旬に1週間の学期中休暇があり、授業期間は13週である。講義のあと再び、1週間の試験準備休暇があり、3週間の試験期間がある。第3学期は11月下旬から2月下旬までの3カ月だが、一般の学生には夏期休暇となり、授業は行われない。

各授業は、少数の通年科目を除いて、学期ごとに完結する。それぞれの授業は1回が60分で週2－5回開講される。一番多いのは週3－4回である。これをどのように開講するかは教員の裁量にまかされているが、原則的に、2日以上に分けて開講し、1日で続けてしまうことは少ない。またその60分はほとんど時間一杯に使われて行われる。週3時間の授業の場合、2時間が講義、残り1時間がチュートリアル と呼ばれる演習または実習であることが多く、すべてが講義に使われることはない。講義は主に教師が一方的に講義を行うものであるのに対して、チュートリアルにおいては、学生への質問、学生からの質問、学生の発表などが行われ、学生の主体的授業参加が重んじられている。こうした授業ではまたレポート（英語ではpaper）の提出が重んじられている。1科目あたり2000語のレポートを最低1回は書かなければならない。2回から3回提出を要求されることもある。

授業での受講生数は科目によって大きく異なる。おおむね20人程度におさまっているが、必修科目の場合には受講生が多く80人に達するものもある。また開講するための最少人数

も10人と決められている。

学生にはコースの概要と授業の概要を記した年度ごとのハンドブックが配布される他に、授業の初回にはCourse Guide と呼ばれるシラバスが教師から渡される。このシラバスには、科目の目標が明示される他に、毎回の授業の計画、毎回ごとの授業内容、および授業に臨む前に読んでおくべき参考書、授業後に行わなければならない課題が詳細に説明されている。シラバスに記載されている参考書は図書館に揃えられているものが多い。

学位を取得するには、3年間在学し、20科目の履修が必要である。これは1年6－7科目、1学期3－4科目の履修となる。1科目は2－5時間の履修であるから、1日2－4時間の履修である。

科目は履修する課程によって、かなり明確に指定されている。例えば、アジア国際学科では、アジア学専攻6科目、第2専攻6科目、基本科目2科目、選択科目6科目を履修しなければならない。

専攻とは、ある程度履修時期が指定された科目群である。例えば、アジア学専攻では表1ような履修年次が指定された科目群で構成されている。専攻としては、このほかに表2のようなものがある。この中には、心理学や都市計画のように履修年次が厳格に指定されているものや、選択の幅の大きいものまでさまざまである。このように専攻の種類は多いが、学位の種類によっては、専攻の履修がかなり明確に指定されている。先ほどのアジア学で学士の学位を取得する場合は、第2専攻は制度上は自由に選べるようになっているが、実際上は「アジア語を専攻することが強く勧められ」ている。そのため、まったく自由に履修できる科目は20科目のうちの6科目にすぎない。

表1　VUTアジア学専攻の履修科目

第1年次	Australia in Asia Asia: Anthropological Issues
第2～3年次	以下の授業科目から4科目履修 Introduction to Asian Studies The City in Asia Asian Cultures and Literatures Colonialism, Nationalism and Revolution in Southeast Asia Gender and Sexuality: Asian Aspects Business Cultures in Asia Cultures and Politics in Indonesia The Search for Meaning in Asia Industrial Development in Asia Research Methods and Techniques in Asian Studies Asian Communities in Australia Asian Studies Elective 2A Asian Studies Elective 2B Asian Studies Elective 2C Southeast Asian Politics Northeast Asian Politics

学位を取得するための課程

は、ビクトリア工科大学文学部に関しては表3ようなものがあり、学位取得の条件はそれぞれ表4の通りである。ここから判明する通り、文学士（フッツクレー）と文学士（セント・オールバンズ、ウェリビー）はかなり自由に科目の選択ができるが、それ以外の学位取得に関しては外枠がかなり明確にされている。

表2　VUT文学部の専攻

アジア学	ベトナム語
非英語圏出身者のための上級英語	アジア太平洋学
オーストラリア英語	コミュニケーション研究
中国語	コミュニティー開発
文化学	メディア研究
ギリシア語	マルティメディア
史学	組織学
現代史学	政策学
インドネシア語	専門著述
日本語	心理学
文学	社会心理学
政治学	社会調査法
社会学	スペイン語
都市計画	女性学
都市学	

表3　VUT文学部で取得可能な学士の学位

1	文学士（フッツクレー）
2	文学士（セント・オールバンズ、ウェリビー）
3	文学士（アジア学）
4	文学士（コミュニティー開発）
5	文学士（コンピューター利用芸術）
6	文学士（人的奉仕）
7	文学士（マルチメディア）
8	文学士（都市地域計画）
9	ソーシャルワーク学士
10	理学士（心理学）

表4　ＶＵＴ文学部の学士の学位取得条件

1　文学士（フッツクレー）	1）20科目の履修 2）承認された2専攻の履修。そのうち1専攻は文系の専攻でなければならない。 3）基礎科目2科目 4）承認された自由な6科目
2　文学士（セント・オールバンズ、ウェリビー）	1）20科目の履修 2）承認された2専攻の履修。そのうち1専攻は文系の専攻でなければならない。 3）基礎科目2科目 4）承認された自由な6科目
3　文学士（アジア学）	1）20科目の履修 2）アジア学専攻の履修。 3）承認された1専攻の履修。（アジア言語の履修が強く勧められている） 4）基礎科目2科目
4　文学士（コミュニティー開発）	1）コミュニティー開発に関する2専攻 2）以下の副専攻専攻を2つ 調査 政策学 背景研究科目（社会学、政治学、経済学） 2選択科目 フィールドワーク1 フィールドワーク2 フィールドワーク3

5　文学士 （コンピューター利用芸術）	1）コンピューター利用芸術専攻の履修 2）アナログ芸術専攻の履修 3）専門関連３科目 4）２選択科目
6　文学士 （人的奉仕）	1）政策学専攻の履修 2）社会科学専攻の履修 3）人的奉仕専攻の中心３科目の履修 4）２基礎科目の履修 5）３自由科目の履修 6）２フィールドワーク科目の履修
7　文学士 （マルチメディア）	1）２０科目の履修 2）マルチメディア専攻の履修 3）コミュニケーション学専攻または専門著述専攻の履修 4）２基礎科目の履修
8　文学士 （都市地域計画）	（ハンドブックに記載なし）
9　ソーシャルワーク学士	同　上
10　理学士 （心理学）	同　上

表５　ＶＵＴ文学専攻の履修科目

第１年次	Aboriginal Australia－Introduction to Cultural Studies Equality and Equity または Australia Now － The Local and the Global Sources of Contemporary Culture
第２年次	以下のうちから２科目 Sociology of Languages Post-Modern Cultures and Contemporary Societies Love, Sexuality and Subjectivity Media Studies Images of Italy Making Modern Identities Italian Presence in Australia after WW2 Cultural Theory and Method Nation, Culture and Globalization
第３年次	以下のうちから２科目 Sociology of Languages Post-Modern Cultures and Contemporary Societies Love, Sexuality and Subjectivity Media Studies Making Modern Identities Italian Presence in Australia after WW2 Cultural Theory and Method Nation, Culture and Globalization

(2)　文化に関する教育

文化に関する教育はどのように行われているのであろうか。文化学教育の中心をなすべき文化学専攻の科目履修は表５のようになっている。ここで文化学のもっとも基礎となるべきCultural Theory and Method が、必修科目に指定されていないことは注目に値する。文化学を専攻したことが、文化学の基礎的授業科目を履修することにはならないのである。

アジア学専攻を履修する場合の履修方法は表１の通りである。ただし文学士（アジア学）の学位を取得する学生は、上記のIntroduction to Asian Studiesが必修であり、さらに表６から１科目履修しなければならない。この専攻においては、Asia: Anthropological Issues が必修となっており、文化学の基礎的概念の履修が義務づけられていることと、中国語、日本語、ベトナム語を履修する場合には、それぞれの国の文化について履修が義務づけられていることが特徴である。

コミュニケーション学専攻においては表７ような履修方法を採っている。本専攻においても、Communication Studies A － Culture and Communication が必修となっており、文化に関する科目の履修が義務となっているのであるが、内容はコミュニケーションに関連して教えられており、文化学そのものの科目ではない。

歴史学専攻、現代歴史学専攻、文学専攻、女性学の履修方法は、それぞれ表８、表９、表10、表11の通りであるが、これらを見れば、いずれの専攻にも文化の基礎を学ぶ科目が必修として設置されていないことがわかる。

文学士（フッツクレー）および文学士（セント・オールバンズ）の学位取得には、１年次に表12のような基礎科目が必修化されており、文化学に関する科目の設定が行われているわけだが、内容はヨーロッパ文化とオーストラリア文化の関係に関する科目である。

このようにして文化に関連する専攻の履修において、文化学関連科目が必修化されているのは唯一アジア学専攻においてであるが、それも半分はアジア問題を論じながら人類学の教育を行うという形態がとられている。

ビクトリア工科大学文学部で開講されている文化に関連している授業科目（授業科目名に文化という言葉をもっているもの）は表13の25科目である。ここから分かる通り、Cultural Theory and Method 以外は個別文化か、文化の特殊領域を論じている。すでに述べた通り、Cultural Theory and Method はいかなる専攻においても必修科目とされておらず、アジア学においてのみ、Asia: Anthropological Issues が必修科目とされ、

基礎的科目として配置されているのである。ビクトリア工科大学において、文化学の体系的な教育はまだ十分に確立していない、ということができよう。

表6　ＶＵＴ文学士（アジア学）の学位の必修科目

Chinese Society and Culture Japanese Culture and Society Introduction to Vietnamese Culture and Society

表7　ＶＵＴコミュニケーション文学専攻の履修科目

第１年次	Communication Studies A－Culture and Communication Communication Studies B－Mass Communication and Society
第２年次	以下から２科目 Language in Society Interpersonal, Group and Organisational Communication Studies in Cinema Studies in Television
第３年次	Imag (in) ing Genders: Women's Studies 3A Communicating with Radio Communication and Cultural Diversity Communicating in Organisations Scripting, Directing and Producing the Documentary

表8　ＶＵＴ歴史学専攻の履修科目

第１年次	History 1A-Australian History:19th Century History 1B-Australian History:20th Century
第２年次	前期に以下の１科目 European History 1 History-The Rise and Fall of Apartheid 後期に以下の１科目 European History 1 Colonialism, Nationalism and Revolution in Southeast Asia
第３年次	前期 History-Twentieth Century America 1 後期に以下の１科目 History-Twentieth Century America 2 Colonialism, Nationalism and Revolution in Southeast Asia

表9　ＶＵＴ現代歴史専攻の履修科目

第1年次	Sociology 1A (Introduction to Sociology) Sociology 1B (Social Order: Deviance and Social Control) または Sociology of Urban Life または History 1A-Australian History:19th Century History 1B-Australian History:20th Century または Australian Politics Introduction to Political Science または Psychology 1A Psychology 1B または Understanding the City 1 Understanding the City 2
第2年次	Making Modern Identities Sociology of Health and Illness
第3年次	Governing City Life Knowledge and Power (Genesis of the Social Sphere)

表10　ＶＵＴ文学専攻の履修科目

第1年次	フッツクレー・キャンパス Literary Studies 1A − Introduction to Literary Studies: Reading and Genre Literary Studies 1B − Australian Literature または Literary Studies − The Practice of Writing セント・オールバンズ・キャンパス Literary Studies 1C − Studies in Contemporary Fiction Literary Studies 1D
第2～3年次	以下から4科目を履修 Literary Studies 2C - Modern Latin American Fiction Popular Fictions Children's Texts Literary Studies 3C − Writing Selves Literary Studies 3D − Sociology of Literary Production Women Writing Writing and Cultural Difference Literary Studies 2A - Literature and Cultural Change 1300-1780 Literary Studies − Writing and Cultural Change Literary Studies 2B: Romance and Realism in the 19th Century Literary Studies 3B − Twentieth Century Literature and Literary Culture Literary Studies 3A - Literature and Imperialism Literary Culture

表11　ＶＵＴ女性学の履修科目

第1年次	Sex and Gender: Women's Studies 1A Fashioning Gender: Women's Studies 1B
第2年次	Researching Women's Lives: Women's Studies 2A Gender on the Agenda: Women's Studies 2B
第3年次	Feminist Praxis: Women's Studies 3B および以下の1科目 Imag(in)ing Genders: Women's Studies 3A Rethinking the Family: Women's Studies 2／3C Gender Cross Culturally: Women's Studies 2／3D Women and Health Women Writing

表12　ＶＵＴ文学士の学位必修科目

フッツクレー Australia Now − The Local and the Global Sources of Contemporary Culture セント・オールバンズ Ways of Knowing 1A Ways of Knowing 1B

表13　VUT文学部の文化に関する授業科目

Asia: Anthropological Issues（アジア学専攻）
Asian Cultures and Literatures（アジア学専攻）
Business Cultures in Asia（アジア学専攻）
Cultures and Politics in Indonesia （アジア学専攻、政治学専攻）
Chinese Society and Culture（中国語専攻）
Japanese Culture and Society（日本語専攻）
Introduction to Vietnamese Culture and Society（ベトナム語専攻）
Communication Studies A-Culture and Communication（コミュニケーション研究専攻、メディア研究専攻）
Communication and Cultural Diversity（コミュニケーション研究専攻）
Communication across Cultures (Honours)（文学部優等特別コース）
Writing and Cultural Difference（専門著述専攻）
Aboriginal Australia - Introduction to Cultural Studies（文化学専攻）
Post-Modern Cultures and Contemporary Societies（文化学専攻）
Cultural Theory and Method（文化学専攻）
Nation, Culture and Globalization（文化学専攻）
Sources of Contemporary Culture （文化学専攻、基礎科目）
Literary Studies 2A - Literature and Cultural Change 1300-1780（文化学専攻）
Literary Studies - Writing and Cultural Change（文学専攻）
Cross-Cultural Counselling（心理学優等特別コース）
Social and Cultural Studies Honours: Governing the City（文学部優等特別コース）
Sociology 2A - Social and Cultural Change in Asia（社会学専攻、アジア太平洋学専攻、政治学専攻）
Sociology 2A - Social and Cultural Change in the South Pacific（社会学専攻、アジア太平洋学専攻、政治学専攻）
Sociology 2／3G - Childhood across Cultures 1 Semester（社会学専攻、政策学専攻）
Sociology 2／3D - Multiculturalism and Ethnic Relations（社会学専攻、政策学専攻）
Gender Cross Culturally: Women's Studies 2／3D（心理学専攻、女性学専攻）

(3)　教育改革の動向

ビクトリア工科大学文学部は、大きな教育改革を行いつつある。1998年に開講される授業数が大きく変化した。1996年には321科目だったものが、1997年には325科目に増え、さらに1998年には375科目となった。

この変化は、学部の改組と関係がある。表14のように、1998年にはそれまでの6学科が、4学科に改組されている。

学部改組に伴って行われた教育改革においては、学生の興味に従って選択させる自由性拡大の方向が採られている。例えば、アジア学専攻では、1996年度には表15のような科目が必修であった。しかしすでに見たとおり、1997年には、アジア学専攻は表1のような履修方法に変えられた。すなわち、必修科目が少なくなり、選択科目が多くなったのである。これは学生の選択の自由の拡大を意味する。

同様に主として必修科目で構成されていたものが、選択制に変わった専攻は、表16の通

りである。また新しく設置された専攻は表17の通りである。これらのうち、インドネシア語専攻とマルティメディア専攻は必修科目からなっており、現代史学専攻は第2年次と第3年次が必修科目を履修することになっているが、他は選択科目によって構成されている。

以上のように、全体とすると必修科目が減り、選択科目が増えて、学生の選択の自由が増していると言える。

表14　ＶＵＴ文学部の学科再編

１９９７年	１９９８年
アジア言語学科	アジア国際学科
コミュニケーション言語学科	コミュニケーション言語文化学科
人文学科	心理学科
心理学科	社会調査コミュニティー学科
社会文化学科	
都市社会政策学科	

表15　ＶＵＴの1996年のアジア学専攻履修科目

第１年次	第１学期	Australia in Asis
	第２学期	Society, Culture and Environment in Southeast Asia
第２年次	第１学期	Asian Cultures and Literatures
	第２学期	Colonialism, Nationalism and Revolution in Southeast Asia
第３年次	第１学期	The City in Asia
	第２学期	Industrial Development in Asia

表16
ＶＵＴで選択制に変わった専攻

政治学専攻
歴史学専攻
文学専攻

表17　1998年にＶＵＴ文学部に設置された専攻

現代史学専攻
インドネシア語専攻
メディア研究専攻
マルチメディア専攻
組織学専攻
政策学専攻
心理社会学専攻

4　宇都宮大学国際学部における文化に関する教育の現状[2]

(1)　教育課程

宇都宮大学の学年暦では、4月の第2週に入学式が行われ、第3週から授業が開始される。学期は2学期で、前期が8月上旬まで、後期が10月第1週から、2月下旬までで、平均15週を含んでいる。休業は、夏期休業が8月上旬から9月末まで、冬季休業が12月下旬から1月初旬まで、春期休業が2月下旬から4月初旬までであるが、最近は休業中にも相当数の集中講義が実施されている。

各授業は、少数の通年科目を除いて、学期ごとに完結する。それぞれの授業時間は、授業形態によって異なる。講義および演習は2時間（実授業時間90分）、実験・実習は3時間（実授業時間135分）である。講義と演習、実習・実験は分離されていて、同一授業科目内で統合されてはいない。

授業での学生数は授業によって大きく異なる。最大のものは、教養課程の200人であり、少数の場合は数人ということもある。クラス規模は極めて変動幅が大きい。

学生には、共通教育科目と専門教育科目の「シラバス」が配布される。これはビクトリア工科大学のシラバスとは異なり、1ページに授業計画を記したものである。

学位を取得するには、4年間在学し、共通教育科目30単位、専門教育科目90単位、自由科目4単位、合計124単位を取得しなければならない。これを取得すると、学士（国際学）の学位が授与される。

共通教育科目30単位には、通年科目4科目、学期完結科目13科目が含まれる。また専門教育科目90単位には通年科目2科目と学期完結科目37科目、および卒業研究が含まれる。自由科目4単位は、学期完結科目2科目に相当する。したがって、卒業に必要な科目数は、通年科目6科目、学期完結科目52科目、それに卒業研究である。したがって、卒業研究を別にして4年間を平均すると、学期に通年科目1.5科目と学期完結科目を6.5科目履修することになる。1科目週90分であるから、毎日約2.4時間の履修を行うことになる。

カリキュラムの構成は、宇都宮大学の学生が必ず履修しなければならない共通教育科目と、学部学科によって特色のある専門教育科目、それにそうした制限にとらわれず自由に履修できる自由科目に分かれている。

共通教育科目は、第1年次生を大学の教育や研究に親しませるための初期教育と、広い視野を身につけ、人格形成に役立てるための教養教育に分かれている。教養教育はさらに、語学、情報処理、体育・保健、人文科学、社会科学、自然科学の分野に分かれ、それぞれ

の分野で一定科目数を履修するように求められている。

国際学部の専門科目は、学部の学生全員に必修化されている学部基礎科目と、所属する学科に必修の学科基礎科目、それに必修選択科目および選択科目に分かれている。

学部基礎科目は、さらに基礎科目、専門外国語科目、情報分析科目に分かれている。基礎科目は表18の５科目で、国際学部の学生全員が履修しなければならない。専門外国語は表19の７言語で、国際学部の学生はそのうちの２言語を履修しなければならない。情報分析科目は社会情報論と文化情報論で、２科目とも必修である。

国際社会学科の学科基礎科目は、表20の通りであり、国際社会学科の学生に必修の科目である。一方国際文化学の学科基礎科目は、表21の通りであり、国際文化学科の学生に必修の科目である。

この他に各学科の選択必修科目というものがあり、20科目40単位の中から、４科目８単位を履修しなければならない。残りは選択科目と呼ばれ、２学科で選択科目（必修選択科目も含まれる）の中から、15科目30単位を履修しなければならない。

さらに演習及び実験実習科目と呼ばれる科目がある。この科目が学生が主体的に履修する科目であり、４科目８単位が必修とされている。

卒業研究は、この演習及び実験実習科目に関連するテーマを選んで、教員から指導を受けながら、卒業論文を制作するもので、第４年次に履修する必修科目である。

以上のカリキュラムから分かる通り、宇都宮大学国際学部においては、学部基礎科目と学科基礎科目および情報分析科目を除いて、学生が必ず履修せねばならない授業科目が少ない。ビクトリア工科大学文学部に比較して学生の選択の自由度が高いと言えよう。

表18　ＵＵ国際学部学部基礎科目

国際関係論
地域研究論
外国語学習とコミュニケーション
文化人類学
異文化間コミュニケーション

表19　ＵＵ国際学部専門外国語科目

英語
フランス語
ドイツ語
ロシア語
中国語
韓国語
タイ語

表20　ＵＵ国際学部国際社会学科基礎科目

国際政治論
国際法　Ⅰ
国際経済論
国際社会論

表21　ＵＵ国際学部国際文化学科基礎科目

言語学入門
比較文化論
芸術文化論
西洋現代思想

表22　ＵＵ国際学部国際文化学科の文化学関連科目

第１年次	第２年次	第３年次	第４年次
学部基礎科目（必修） 地域研究論 外国語学習とコミュニケーション 文化人類学 異文化間コミュニケーション 学科基礎科目（必修） 言語学入門 比較文化論 芸術文化論 西洋現代思想 必修選択科目（４年間で４科目） 日本文化論 イギリス文化論 アメリカ文化論 ドイツ文化論 フランス文化論 選択科目（４年間で15科目以上） 近代日本文学論 西洋史概説 日本史概説	学科基礎科目（必修） 芸術文化論 西洋現代思想 必修選択科目（４年間で４科目） 中国文化論 東南アジアの文化と歴史 アジア現代思想Ｉ アジア比較地誌論 東西比較文化論 西洋哲学史Ｉ 現代芸術論 表象文化論 身体表現論 言語構造論 対照言語学 日本語論 選択科目（４年間で15科目） イスラム文化論 イギリス文学史 ロマンス語圏文化論 日朝文化交流史 日中文学影響論 日米比較文化論 日独文化交流史 日欧比較文学論 日本史特殊講義 考古学概説 西洋哲学史概説Ⅱ 言語と音声 日本語史 演習及び実験科目（第２年次より３年間で４科目履修） 文化人類学演習 芸術文化論実習 表象文化論演習 西洋現代思想演習 外国語学習とコミュニケーション演習 言語学入門演習 日本語論演習 近代日本文学論演習 アジア比較地誌論演習 ドイツ文化論演習 フランス文化論演習 イギリス文化論演習 イギリス文学演習 アメリカ文化論演習 アメリカ文学演習 比較文化論演習 東西比較文化論演習 日欧比較文学論演習	選択必修（４年間で４科目履修） 日本思想史 近代比較演劇論 国際コミュニケーション論 選択科目（４年間で15科目履修） 朝鮮の文化と歴史 アジア現代思想論Ⅱ 地誌学原論 アジア民族音楽論 アメリカ文学史 比較児童文学論 東洋史概説 比較思想論 比較宗教文化論 比較芸術論 西洋美学 芸術情報論 言語と認知科学 日中語比較論 異文化間教育 演習及び実験（第２年次から３年間で４科目履修） 国際コミュニケーション論演習 考古学概説演習 アメリカ文学演習 東西比較文化論演習 近代比較演劇論演習	必修科目 卒業研究 選択科目（４年間で15科目履修） 日本武道論 民族芸術論

(2)　文化に関する教育

文化に関する教育はどのように行われているのであろうか。文化学教育の中心をなすべき国際文化学科の文化関連科目の履修は、表22のように行われている。(文化に関連しない授業科目は省略)。ここから分かる通り、1年次には文化人類学、異文化間コミュニケーション、比較文化論、芸術文化論を必修として履修するために、文化学の基礎的科目は配置されている。しかし、その履修と同時に多数の個別文化に関する科目の履修が行われているため、それらの個別文化の履修の際に、基礎的な知識に基づいて履修がなされているか不明である。また講義と演習及び実習実験科目の履修が別々に行われており、文化学の基礎的科目を聴講しただけで、その知識が深化させられているか分からない。さらに、選択科目が多数に上るため、十分な関連づけがなされないままに、履修が行われる可能性がある。

(3)　教育改革の動向

宇都宮大学国際学部は、設置から4年を経て、1999年度より教育課程に変更を加えることになった。

その主なものを挙げると、第1に演習及び実験実習科目の履修科目数を4科目から2科目に減らした。これは、学生が多数の科目を履修しなければならない負担を減ずる目的で行われるものである。第2に、情報分析科目の必修科目を4単位から2単位に減らした。第3に、必修選択科目を廃止し、それらをすべて選択科目とした。これらの3つの変更のため、選択科目の履修科目数が15科目から23科目に増えた。この変更の意味するところは、学生の選択肢の一層の拡大であり、自由性の増大である。

5　ビクトリア工科大学文学部と宇都宮大学国際学部の文化に関する教育体制の比較

2学部の文化に関する教育体制には共通点と相違点がある。以下、相違点、共通点の順で述べたい。

(1)　相違点

大きな相違点のいくつかが、教育制度の違いから生まれている。その最大のものは、在学年数の違いである。ビクトリア工科大学では、3年で学位を取得することができ、宇都宮大学では、4年間在学しなければならない。しかも、ビクトリア工科大学文学部では、概ね20科目の履修で学位が取得できる。それにくらべて宇都宮大学では59科目（通年科目6科目、卒業研究1科目を含む）を履修しなければ学位が取得できない。ビクトリア大学では平均週3.5時間で試験も含め14週で完結するので、学位取得まで、980時間程度の履修

で卒業できることになる。

それに比べて、宇都宮大学国際学部では、通年科目の履修に、1週90分、全30週であるため、45時間、学期完結科目でその半分の22.5時間、卒業研究は通年2科目分と計算されているので、90時間の履修である。したがって、学位取得のための履修時間は1530時間である。

この差の大きさは、共通教育科目から生じている。宇都宮大学国際学部での共通教育科目の履修数は通年科目4科目、学期完結科目13科目であるので、427.5時間である。したがって専門科目だけの履修時間は1057.5時間であり、ビクトリア工科大学文学部とそれほどの差はなくなる。宇都宮大学国際学部の教育の大きな特徴は、共通教育から生まれているのである。

しかし、宇都宮大学国際学部において、多数の授業科目を履修しなければならないという相違点は残る。すでに述べた通り、宇都宮大学では専門教育科目として、42科目を履修しなければならない（通年科目2科目、卒業研究1科目を含む）。ビクトリア工科大学文学部の2倍以上の科目の履修が必要となっているのである。

授業の構成の違いも大きい。ビクトリア工科大学文学部では、1授業科目が1週3時間から4時間行われ、しかもそこには講義と宇都宮大学の演習にあたるチュートリアルが含まれる。つまり宇都宮大学国際学部のように講義による授業科目と演習や実習実験による授業科目が分かれていないのである。これは1つの領域に関する知識の獲得方法としては、優れているように思われる。学生は、教員の講義を聞いた上で、学生自身が主体的に問題に取り組み、教員に質問したり、教員が質問して学生の理解度を確認したり、学生の調査の発表をしたり、またレポートを書いて、さらに理解度を深化させることができる。

これに対し、宇都宮大学国際学部では、専門教育に関し演習の形態をとるものは専門外国語5科目、情報分析科目2科目、演習及び実験実習4科目、卒業研究1科目で、合計12科目である。つまりビクトリア工科大学ではチュートリアルがすべての科目に含まれているのに対して、宇都宮大学国際学部ではそれに対応するものが30%弱にすぎないのである。これは多くの授業で演習的要素を加えて対策を立てているとはいえ、宇都宮大学国際学部の方が受動的履修を認めているということになろう。

しかしビクトリア工科大学では学位の取得に卒業論文が必修化されていないのに対して、宇都宮大学国際学部では卒業研究として卒業論文の提出が求められている。これは大きな相違であり、この科目を活用することによって学生の受動性を克服できる可能性が残され

ているとも考えられる。ただし、ビクトリア工科大学では、すべての科目で2000語のペーパー提出が最低1回は求められ、卒業論文を書かなくとも、学生に研究方法を身につけさせる教育制度は確保されているのである。また、ビクトリア工科大学のオナーズの制度は、成績の優秀な制度がさらに1年間の履修をするものであるが、ここでは卒業論文の提出が求められている。これは日本と同じく4年の修業年限となるが、さらに高い論文が求められており、選ばれた優れた学生にのみ、高度の論文の作成を求める制度だとも解釈できよう。

ビクトリア工科大学文学部の選ばれた科目を深く学ばせるという教育姿勢は、教育課程の配置にも表れている。すでに述べた通り、専攻の構成にあたっては、同学部でも次第に学生の選択肢を拡大し、その自由性を増す方向に進んでいると言えるが、宇都宮大学国際学部と比べると領域が明確化されており、学ぶ内容が明らかになっている。また各学科には、コース・コオーディネーターと呼ばれる専門の教員がいて、学生の履修科目について指導助言を与えていることも大きな特徴である。

これに比較して、宇都宮大学国際学部では、学部基礎科目と学科基礎科目を必修化しているとはいえ、必修として履修する科目は専門教育科目42科目の11科目にすぎず、ほぼ4分の1である。それ以外はかなりの自由度をもって履修することができる。専門外国語科目の履修すべき5科目は29科目の中から選ぶことができ、また学科必修選択科目は20科目の中から4科目を選ぶことができる。選択科目に至っては、履修すべき15科目を55科目の中から（理論的には国際社会学科で開講している科目も履修できるので121科目の中から）選ぶことができる。また演習はそれに対応する講義を履修していることが前提であるが、4科目を22科目から選べるのである。非常に多数の授業科目が用意されているといえる。

これに対して拡散を防ぐために、教務委員会は「履修の手引き」を作っているが、学生たちの大部分は教員の考えには必ずしも従わずに履修科目を選んでいるようである。

最後の大きな相違点は、シラバスの内容である。宇都宮大学では平成5年度から学生にシラバスを配布し、授業計画を明らかにしている。これは大きな冊子であり、そこにはすべての授業の授業計画と授業内容が書かれているが、1ページという限界があり、毎回の授業の内容が詳しく記載されているわけではない。

これに対し、ビクトリア工科大学の Course Guide と呼ばれるシラバスには、毎回の授業計画、読んでおくべき参考書名、課題の詳しい指示が記載されている。この印刷物は全員に配られるわけではない。学生はハンドブックと呼ばれる全員に販売される冊子によって科目を選択すると、コース・コオーディネーターまたは担当者が詳しいシラバスを与え

る仕組みになっている。

以上の相違点を総合すると、ビクトリア大学文学部においては履修の対象をかなり明確に限定した上で学生の能動的学習能力を喚起しながら深く学ばせようとしているのに対し、宇都宮大学国際学部では、多数の授業科目を提供し、学生に選択の自由を与えた上で、学生の興味に従って授業科目を選ばせ、広い領域の履修を目指していると言えよう。

(2)　共通点

2学部とも設置されて日が新しいために多くの共通点をもっている。第1に国際学と文化学の重要性の認識が、組織として反映されていることである。ビクトリア工科大学文学部においては、アジア国際学科を持ち、またコミュニケーション学言語学文化学科をもっている。宇都宮大学国際学部では、学部名に国際学を冠し、また国際文化学科をもっている。

第2の共通点は、教育内容に実際性を重んじていることである。ビクトリア大学ではそのことが、授業名に反映している。例えば、表24に見られる通り、現実の問題を論ずるために、伝統的な授業名を具体的な授業名がとって替わっているのである。

さらに同学部は、二重学位制を設けて、実際性を高めている。これは在学を4年まで延長し、たとえばアジア学と国際貿易学の両方を取得させ、アジア学に実際性を与えるとともに、国際貿易学に具体的な知識を与えて、ともに有効性を高めようという制度である。現在、二重学位は表25の4学位が用意されている。

表24　VUT文学部の実際的科目の例

Colonialism, Nationalism and Revolution in Southeast Asia
Gender and Sexuality: Asian Perspectives
Nation, Culture and Globalization
Australia Now − The Local and the Global
Making Modern Identities
Gender Cross Culturally: Women's Studies 2／3 D

表25　VUT文学部の二重学位制

文学士／ビジネス学士（情報システム学）
ビジネス学士（観光管理学）／文学士（アジア学）
文学士（アジア学）／ビジネス学士（国際貿易学）
文学士（心理学）／ビジネス学士（人的資源管理学）

宇都宮大学国際学部は、設置当初からその目的の第1に、「国際化に対応した教育と人材の養成」を挙げ、つぎのように述べている。「……さらに、この複合的ネットワークの形成と密接不可分の関係にある日本社会も、諸外国との〈もの〉、〈ひと〉、〈情報〉の交流において急激な国際化の過程にあり、これに伴う種々の問題と直面している。このような事態を正確に把握しつつ、これに国際的視野をもって対処できる能力を備えた人材の養成は、大学に課せられた緊急かつ重要な社会的責務の一つである。宇都宮国際学部は、

このような社会的責任を果たすために、次の二点を基本とした人材を養成する。(以下省略)」(「宇都宮大学国際学部設置計画書」より) この学部においても、実際的教育が重んじられているのである。

このような実際性の重視は、反面学問の体系性の欠如を招く。2学部とも意識的に体系性を避けているとも言えるのだが、学問が本質的に体系性を志向するものである以上、従来の体系性を否定するのであれば、それに替わる新しい体系性が必要となるところであるが、2学部においてそれはまだ十分ではない。

第3に、2学部とも学際的研究教育を重視していることも、共通点である。ビクトリア工科大学文学部では、例えば Love, Sexuality and Subjectivity において、フロイトの心理学やフーコーの心性史が論じられ、また社会学的視点が取り入れられている。このような学際領域の授業科目は多数に上る。

宇都宮大学国際学部は設置当初から、学際領域を重んじることを明確にしている。その設立の趣旨にこのように明記されている。「……これらの対立・摩擦の原因を解明し、多文化に対するより深い理解の可能性を探求するためには、従来の個別科学研究のみでは必ずしも十分でなく、社会諸科学、人文諸科学、情報科学相互の有機的な協同・連携による学際的、総合的な研究が必要とされている。(以下省略)」同学部の授業科目はこのような理念に沿って配置されているのである。

第4番目には、2学部ともアジアを重視していることで共通している。ビクトリア工科大学には、アジア国際学科が設置されており、多数の授業科目が配置されている。学位も、文学士(アジア学)が用意されている。一方宇都宮大学国際学部では、国際社会学科で「日本、アジアを中心とした政治、経済、社会に関わる諸問題について教育研究を行う。」と明記されている。2学部ともそれぞれの国がアジア太平洋地域に位置することに対し、きわめて敏感になっていると言えよう。

第5の共通性は、外国語教育の重視にある。ビクトリア工科大学アジア国際学科では、学生に中国語、日本語、ベトナム語のいずれかを履修するように勧めている。また同学部で開講されている外国語は、その他にスペイン語、ギリシア語、インドネシア語がある。

宇都宮大学国際学部でも、外国語が重視され、専門外国語として、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語、タイ語のうちの2カ国語を履修することが求められている。これは設置当初の特色として打ち出されたものであった。

第6の共通点は、コンピューター教育の重視である。ビクトリア工科大学文学部にはマ

ルチメディア専攻があり、また学生にコンピューター利用が強力に勧められている。ペーパーはコンピューターによって作成されなければならない。

宇都宮大学国際学部でも、情報分析科目が必修科目であり、学生のコンピューターリテラシー獲得が設立当初から図られている。

このように、2学部は、相違点とともに共通点も多数もっているのである。

6　ビクトリア工科大学文学部の文化に関する教育の特質と今後の課題

同学部の文化に関する教育体制は、専攻の設置によって履修範囲を明確にしている点で、学生に目的が明確化され、履修を容易にしている長所がある。また授業科目に現代の問題と直接切り結ぶ科目が多数配置され、学問の実際性に重点が置かれているため、学生の学習意欲を喚起する助けにもなっている。さらに各授業科目は、講義とチュートリアルが結合されており、教師の講義を聞き、理解するだけに終わらず、教師が質問して理解度を確認し、学生もまた教師に質問する機会が与えられる。この講義形態のため、1科目の授業時間が平均49時間と長く、しかも週に平均3.5時間（最低2日）にわたって開講されることも学習内容理解を深化させるであろう。その上、課題の発表をさせたり、ペーパーを書く指導もできて、学生が能動的に学習し、知識を深める教育体制がとられていることも、大きな長所である。

学生の履修にあたっては、Course Guide と呼ばれる詳細なシラバスが渡され、またコース・コオーディネーターが履修方法の指導にあたっていることも、この教育体制の長所をさらに大きくしている。

今後の第1の課題は、文化に関する教育に体系性を確保することである。これはとりわけコミュニケーション言語文化学科の教育について言えよう。すでに指摘した通り、文化学専攻の科目群において、もっとも基礎となるべき授業科目 Cultural Theory and Method が選択科目になっていて、この科目を履修しない学生は、文化学の理論的知識を得ないまま、専攻の履修を終えてしまう可能性があるのである。課程の構成において、文化学専攻を中心とした場合に、理論に関するこの授業科目を適切に位置づけることが大切なように思われる。

アジア学専攻は、基本的に地域研究であるが、人類学が必修とされているので、文化を中心に学習する場合にも、問題はないように思われる。しかし例えばコミュニケーション専攻や社会学専攻で文化を扱った場合には、文化学専攻と同様の問題が生じるおそれがあ

る。これらの専攻の場合に、Cultural Theory and Method の授業科目を必修とする必要はないであろうが、文化学専攻の中で必修となっていれば、その重要性を表す指標として役立つであろう。対策はいずれにせよ、これからの課題は文化に関する教育の体系性を確保することであるように思われる。

ビクトリア工科大学文学部の第2の課題は、1998年にアジア国際学科が設置されたことに対する多様な授業科目の配置である。同学部では、履修が専攻という科目群によって領域を明確化されているため、自由に履修科目を設定することが難しい。また学生はチュートリアルの準備に時間をとられるため、専攻を越えた科目を多数履修することは不可能である。したがって、新しい学科名にふさわしい専攻を設定するか、新しく専攻にとらわれない履修方法を可能にしない限り、アジア国際学科の名称にふさわしい教育が困難なように思われる。これはビクトリア工科大学文学部の教育方法が領域を明確にして、学生に深く学ばせる方法をとっている結果招来されたものとも考えられるが、新たな対応を迫られている課題であるには違いない。[3]

7　宇都宮大学国際学部の文化に関する教育の特質と今後の課題

同学部の文化に関する教育体制は、学生に多数の授業科目を提供し、選択の範囲を大きくして、学生の興味に従った履修を可能にしている点に長所がある。また現代の問題に答える能力を養成するように、教育課程を整理し、授業内容を工夫している点も大きな長所である。設置から4年で、当初の予定をほぼ達成した現在、文化に関する教育についてこれからの課題としては、以下の点が挙げられよう。

第1は、同学部の国際文化学教育課程に含まれている体系性の萌芽を大切にして、それが学生の知識の深化につながるよう改善することである。国際文化学科の学生は、1年次に文化人類学、異文化間コミュニケーション、比較文化論、芸術文化論を必ず履修しなければならない。この4科目は文化学の基礎をなすべき科目であり、このような科目配置になっていることは評価される。

しかしながら、国際文化学科の学生は同時期に、日本文化論、イギリス文化論、アメリカ文化論、ドイツ文化論、フランス文化論など、個別文化に関する授業科目を履修でき、それらが十分な位置づけの上に履修されるか、疑問が多い。言うまでもなく、この配置には2つの解決法がある。第1は帰納法的解決とも言うべきもので、個別的・具体的な事象を多数学んで、のちにそれらから法則性を引き出すやり方である。この問題に引きつけて

言えば、個別文化をいくつか学んだ後、比較文化論や文化人類学などを学んで、個別文化を位置付けていく方法ということができる。この方法を採れば、認識は遅くなるが、先に学んだ内容を後になって整理し、自分の卒業研究に生かすことができよう。それとは対照的に、演繹法的解決も考えられる。つまり一般法則を先に学んで、後に具体的な事象を学び、法則に当てはめて考えていくやり方である。つまり文化人類学や比較文化論などの履修を先に行わせて、それから個別文化の履修をさせるという教育課程の整備方法である。このどちらを採用するにしても、現在の教育課程よりもよい結果を得られる可能性がある。現在は抽象性の高い科目と具体性の高い科目が同時期に履修されており、その整理は学生にまかされている。これは学生の自主性を尊重しているとは言え、十分に成果を得られない危険性が大きく、また実際そうなっていると言える。

必修科目は重要性があるために必修化されている。しかし、宇都宮大学国際学部での取扱いでは、すべての学生が履修することを定める以外、手立てはとられていない。これは受講生の増大を意味するだけで、ある意味では軽視であるとも考えられる。講義形式は、どれほど多くの学生が聴講しようとも、内容が変わらないかぎり、教育効果も変わらないという通念に従い開講されているが、実際に学生の反応を見ていると、多人数であればあるほど印象が薄れ、知識の定着が悪くなる。授業が重要であることを学生に知らせ、その効果を上げるためには、必修化するだけでは十分ではない。受講生数を減らすことと、学生の能動性を高めることが必要である。そのためには同一授業の複数開講および演習の必修化が図られなければならないだろう。

体系性の確保と並んで、学生の能動性の開発も大きな課題である。国際学部の学生が主体性をもっていることは、いろいろな活動から証明されている。この潜在能力を引き出すために、能動的履修を可能にする教育課程が編成されるべきである。つまり、演習や実習、実験の割合をもっと増やす必要がある。しかもそれらをただ増やすだけでなく、講義の内容と関係づける必要がある。また参考書の利用の仕方、ペーパーの書き方、発表の仕方などを計画的に教えていく必要がある。このためには演習担当者の間で共通認識がなければならない。

同学部で、この学生の能動性の開発に関してこれから利用して行くべき制度は、卒業研究である。卒業論文の制作は、学生に能動性を喚起し、主体性を養成するために優れた制度である。この卒業研究に向けて教育課程が整備されるならば、学生の知識が深化し、また体系化される可能性がある。

もう一つの課題、多数の授業科目の中から、知識深化の方向に科目を選択させる課題は、ビクトリア工科大学のコース・コオーディネーターにあたる制度を設置することによって解決できよう。現在、同学部では学生に「履修の手引き」という冊子が配られるだけで、履修科目の選択は学生にまかされている。このため、履修科目の多さという問題の中で、学生は履修の容易な科目の選択に傾きがちである。こうした傾向を是正するためにも、学生に専門的な立場での助言を与える必要がある。おそらくこれは、既存の委員会なり制度で実施が可能であろう。もっとも可能性が高いのは、学年の指導教官にその役割を与えることである。

同学部は、新しい理念のもとに創設され、大きな可能性を秘めている。創設の最初の課題を果たした今、上記の課題に取り組んで、一層の発展が望まれるところである。

9　結　び

本研究は1997年4月から2年間にわたって実施された。その間、宇都宮大学から研究分担者3人が計3回にわたってビクトリア工科大学文学部を訪問し、またビクトリア大学文学部の研究分担者3人が計3回にわたって宇都宮大学国際学部を訪問した。それぞれの訪問中には、授業の参観、資料の収集、授業担当者へのインタビューが行われ、また研究担当者同士の意見交換が行われた。結果として、それぞれの実状が明瞭になり、また自分たちの行っている教育の特質が認識された。

さらに、予定外だったが、ビクトリア工科大学文学部と宇都宮大学国際学部の多くの教官との交流が実現し、文化関連以外の分野でも意見の交換が行われたことである。短期間であれ、実際に訪問してみると、書類だけでは分からないことが明瞭に理解できた。本研究を実施できたことを、研究担当者一同心から喜んでいる。

文化学の体系的な教育は、現実的制約を考えるとなかなか実行がむずかしい。この研究で提案されている改革も、現実での教育でどの程度生かされ、体系性の構築に貢献できるか分からないが、問題の所在に関しては、きわめて明確になったので、これから時間をかけて実現に努力し、異文化の共存と平和実現への貢献という宇都宮国際学部の目標の実現に微力を尽くしたいと思う。

付記　本論は平成9－10年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究「文化学の体系的教育方法の開発に関する研究」（課題番号09045005）の研究成果の一部である。

註　1．調査が行われた1997－8年のものである。

2．調査が行われた1997－8年のものである。

3．地域の選択に関しては、オーストラリアの現状に適合している。

Abstract

Comparison of Cultural Education at the Faculty of Arts, Victoria University of Technology and the Faculty of International Studies, Utsunomiya University

—In Search of a Systematic Educational Method of Culture Studies

Sumio Takagiwa Sherman Lew Yasuyuki Karakita

In this paper the outlines of the two faculties, the Faculty of Arts, Victoria University of Technology and the Faculty of International Studies, Utsunomiya University are described first, followed by the description of the educational systems of the two faculties. At the Faculty of Arts, Victoria University, most full-time students are required to take three majors and two compulsory subjects, majors being groups of subjects which students have to take wholly or partly. At the Faculty of International Studies, Utsunomiya University, students are required to take compulsory subjects and elective subjects, which system gives students greater freedom of study.

Next discussed is the characteristics and problems to be solved. At Victoria University, the number of subjects students have to learn is restricted, which enables them to acquire deeper knowledge. The combination of lectures and tutorials, which is set up in all subjects, helps students to study actively, by requiring oral presentations and／or a paper. At the same time, the restriction of subjects makes it difficult for students to acquire sufficient scope needed for a broad field like international studies. One solution could be to set up a new major for the field.

At Utsunomiya University on the other hand students can select their subjects rather freely, which system carries a risk of acquiring shallow knowledge and disregarding academic disciplines. In order to overcome this weakness, basic required subjects like Cultural Anthropology and Comparative Culture can be strengthened by splitting these large lecture courses into smaller classes, and by combining them with their seminars which should also be made compulsory. The time of taking basic cultural courses like Cultural Anthropology and Comparative Culture, and individual culture studies should be changed so that they are taken at different times.

（1999年11月1日受理）